

〔論文〕

## 絵葉書のメディア論的な予備的分析

毛 利 康 秀

### 1. はじめに

近代郵便制度は1840年にイギリスで始まり、その後欧米各国に広がっていった。日本で郵便制度が創設されたのは1871年（明治4年）のことである。絵葉書の起源は1870年頃のドイツに発するとされ<sup>1)</sup>、私製の絵葉書はドイツでは1872年に、1873年にフランス、1894年にイギリス、1898年にアメリカの順で認可されていった。日本で絵葉書の使用が認められるようになったのは1900年（明治33年）10月のことであるから<sup>2)</sup>、日本における絵葉書の歴史は欧米諸国のそれと大差なく、一世紀を超える長さを有している。

絵葉書は、この一世紀以上の間に多種多様な種類が発行されてきた。風景の絵葉書、絵画の絵葉書をはじめ、美人絵葉書と称されるポートレート絵葉書がブロマイドとして人気を博し、初期においては事件や事故を扱ったニュース性を帯びた絵葉書も少なくない割合を占めていた。絵葉書の発行と収集のブームは世界的に巻き起こっており、1905年（明治38年）における世界の絵葉書の発行枚数は、

18億2967万4000枚に達していたという<sup>3)</sup>。日本においても、絵葉書が解禁されてほどなくブームとなり、日露戦争期には戦勝に関する記念絵葉書が多数発行されて収集熱もあおられ、全国に絵葉書専門店が次々と開店し、ひろく国民に浸透していった。

さて、本稿では、大きく以下の二つの問題意識を持って論考を進めた。

第一は、「メディアとしての絵葉書」という問題意識である。絵葉書はどのようにして誕生・普及し、現在に至っているのであろうか。特に、絵葉書のメディア的な特性に着目し、写真があしらわれた「写真絵葉書」に焦点を当てる。そして、写真絵葉書が出現した時代背景に留意しながら、当時の社会や人々にどのような影響を及ぼしたかについて、これまでの絵葉書の研究史を概観しつつ検討を行う。

第二は、「メディアの中の絵葉書」という問題意識である。絵葉書が人々の間でどのように受容され、社会的に定着していったのであろうか。絵葉書以外に大量の画像を収集・保存出来るメディアが見あたらず、安価な通信手段としても有用であった20世紀初頭、テレビに代表される他の画像メディアが普及し

電話など他の通信手段も広く使われるようになった20世紀中盤以降、そしてインターネットが世界的に普及した21世紀以降では、絵葉書に対する人々の意識や接し方には大きな違いが見られるはずである。これらの変遷をたどる方法として新聞記事に着目し、絵葉書がどのような文脈の中で報じられてきたのか、その内容の分析を行う。そして、「新しいメディア」であるインターネットが台頭した現在において、「従来からのメディア」である絵葉書にどのような存在意義が見いだせるのかについての考察も加えていくことにする。

## 2. 絵葉書に関する先行研究

絵葉書に関する研究の中で先駆的な成果としては、樋畑（1936－1983）の論考が挙げられる<sup>4)</sup>。樋畑は、東西交通文化の流れの中から絵葉書の重要性に着目し、他国の絵葉書発行の状況も踏まえながら日本の絵葉書について論じており、戦前期における絵葉書研究として特筆すべき成果を残している<sup>5)</sup>。

太平洋戦争を挟んで戦後しばらくの間は絵葉書研究が行われなくなり、空白の期間が長く続いた。戦後30余年を経て、小森（1978）による絵葉書集成『絵葉書 明治・大正・昭和』<sup>6)</sup>が送り出されたことを皮切りに、村松（1980）、六角（1981）、秋山（1988）らによる成果<sup>7)</sup>が続いた。写真ジャーナリズムの視点から関東大震災の絵葉書を論じた木村・石井（1990）の研究<sup>8)</sup>、旅と交通の観点から絵葉書の歴史をたどった中川（1990）の論考<sup>9)</sup>もある。佐藤（1994）の成果は、これらの集成を概括した上で論じたものであ

る<sup>10)</sup>。平成期に入ると、小川（1990）が絵葉書の起源に関する諸説を検討し<sup>11)</sup>、富田（2005）は絵葉書を通して近代日本の歴史を浮かび上がらせ<sup>12)</sup>、柏木（2000）はグラフィズムの視点から絵葉書を論じた<sup>13)</sup>。田邊（2002）は絵葉書のメディア的な特性に着目し、かつて絵葉書が果たしていたマス・メディアとしての役割を実証的に明らかにした<sup>14)</sup>。橋爪（2006）もメディアとしての絵葉書に着目し、100年に及ぶ絵葉書の歴史と日本の近代史とを重ねて見せた<sup>15)</sup>。他には、絵葉書趣味の普及と研究を目的とした「日本絵葉書会」が2002年に設立され、継続的な活動を行っている<sup>16)</sup>。

以上が、絵葉書についての主要な先行研究の成果である。これらを概観すると、概ね以下に挙げる視角から展開されてきたことが分かる。すなわち、葉書としての本来の機能に着目した通信史的な視角、絵葉書の芸術的な要素に着目した美術史・文化的な視角、事件や事故が報じられた時期があることによる写真ジャーナリズムとしての視角、そして歴史的な史料としての視角である。

しかし、「絵葉書を主要な対象とした体系的な研究」として考えると、まだまだ発展途上というべき状況が続いている<sup>17)</sup>。佐藤（1994）の分析によると、絵葉書の研究が進んでいない理由として、「各々の専門領域から派生した関心をもとに絵葉書を論じた感が強く、それぞれに独立に研究されて」いて<sup>18)</sup>、相互に絡み合うような考察はあまり行われてこなかったからであると指摘している。絵葉書の歴史は、世界や日本の近代史の歴史ともほぼ重なるが、近代史における大きな歴史的な流れの中から絵葉書をとらえ、そ

の社会的な意味を考察していく試みは、まだまだ十分なされているとは言えない。国家が関与し、公的な色彩の濃い切手や郵便制度に関する研究は一定の進展をみているが<sup>19)</sup>、郵便制度の周辺に位置し私的な通信に用いられる絵葉書は、研究対象の俎上に上りにくかったという一面があることは否めない。とはいえ、メディアとしての絵葉書が果たした役割について考えると、さらなる研究の進展が待たれるところである。これまでに研究されてきた成果を取りまとめつつ、専門領域をまたいだ「相互に絡み合うような考察」を進めていくことが今後の課題になるだろう。

続いて、日本における絵葉書の発達史をたどり、絵葉書の普及が社会にどのような影響を与えたかについて考察を進めていくことにする。

### 3. 絵葉書の誕生と普及

日本における絵葉書は、1900年（明治33年）10月、私製葉書の発行を許可するという通信省令が出されたことに始まる。これにより民間から絵葉書が発行されるようになり、官製の絵葉書も登場したが<sup>20)</sup>、絵葉書の人気が高まったのは通信省が1904年（明治37年）から2年間にわたって発行した日露戦争の戦勝記念絵葉書であるとされる。この絵葉書の人気は凄まじく、『明治世相百話』の中で「戦勝記念の発行ごとに郵便局へ押し寄せる群衆は凄いほどで、中にも陸軍凱旋式記念の一枚は大した人気、各郵便局前は長蛇の列を作ったが、ついに神田万世橋郵便局では人死があったという騒ぎ<sup>21)</sup>」と描写されるほど大

変なものであった。絵葉書の収集は、「誰しも一時は凝った絵葉書の蒐集<sup>22)</sup>」と呼ばれるほどの熱狂的な流行となって、明治の日本を席卷した。

絵葉書の収集がいかにブームになったかは、1904年（明治37年）の『ハガキ文学』の発行を皮切りに、翌年から翌々年にかけて『はがき雑誌』『端書世界』『絵葉書世界』など絵葉書専門の雑誌が続々と創刊されたことで分かる。また、絵葉書の展覧会や交換会も盛んに開催され、例えば歌舞伎座で開催された絵葉書交換会の案内には「出席者は一万枚以上の所有者に限る」と書かれていたが、それでも相当の出席者があったのだという<sup>23)</sup>。

葉書は、郵便での連絡用途で使われるコミュニケーション用のメディアであり、かつ一般の人々が利用出来る最も安価でコンパクトなメディアという位置づけがされていた。絵葉書は、その本来の葉書としての用途に加えて、コレクションの対象としての価値が見いだされるようになり、こぞって買い求められるようになったのである。時節柄、戦勝記念ものが多かったが、現在でいえばブロマイドに相当する美人絵葉書も人気を博したほか、商品を宣伝する広告絵葉書も数多く発行されるようになっていった<sup>24)</sup>。観光地の旧所名跡を紹介する絵葉書も大量に発行され、明治末期には、日光・箱根・横浜・伊勢・京都・宮島・長崎など、めばしい観光地では絵葉書がもれなく発行されており、小川（1990）の研究によると、明治末期における観光絵葉書は3万種類にも達していたという<sup>25)</sup>。

絵葉書のブームは、明治期の日露戦争勝利期のブームのほか、大正期の国力が充実した

第一次世界大戦後のブーム、震災時の災害報道ブームなどがあった。しかし、昭和に入って中国大陸に戦火が広がり、戦争が激しさを増していくにつれて絵葉書の発行数も減少していき、太平洋戦争の敗戦をもって一旦断絶することとなる。

### 3-1. 写真絵葉書の登場とその社会的な影響

日本では、絵葉書が解禁される以前から外国製の絵葉書が日本に紹介されており、1897年（明治30年）頃になると、外国製の絵葉書が市井に出回るようになっていた。日本における絵葉書は、その解禁後にほどなく大ブームになったが、解禁以前から入り込んでいた外国製の絵葉書は、絵葉書ブームの下地をならすものであったといえる<sup>26)</sup>。外国製の絵葉書は、絵画が印刷されたものも多かったが、風景写真の絵葉書も多かった。小川（1990）の研究によると、海外から届く風景写真の絵葉書は頗る珍重され、「近来こういうのが流行する」として珍しがられていたという<sup>27)</sup>。

写真の技術は19世紀半ば頃に実用化されており<sup>28)</sup>、日本にも江戸時代末期から導入されていた。明治時代以降、写真を印刷するための技術の導入も進み、1889年（明治22年）には米国よりコロタイプ印刷技術が導入され、翌年には写真亜鉛版の製版法が、1899年（明治30年）にはアルミ平版輪転印刷機が輸入されて印刷が始められた。日本においては、絵葉書の最初期から写真が多用されたが、絵葉書が解禁される時期に合わせる絶妙なタイミングで「写真を大量に印刷出来る」技術的な基盤も整ったからであった<sup>29)</sup>。

当時の人々にとって、写真は自分の知らな

い内外の風景を知ることが出来るメディアであり、かつ個人で所有することの出来る数少ないアイテムであった<sup>30)</sup>。絵葉書の単価は安く、そして写真絵葉書が大量に発行されていたので、写真は写真絵葉書の形で収集された。「個人が多量の写真を所蔵出来る」という意味においては、写真絵葉書は、まさに最適なメディアであったと言える。

初期の絵葉書は墨塗りの石版画であったが、写真印刷術の進歩によりコロタイプの写真製版が主流となった。それは白黒の1色刷りであったので、一枚一枚着色を施した手彩色絵の絵葉書が生まれたが、ほどなくオフセット多色刷りの技術も導入され、多数の風景写真がカラーで印刷されるようになった。当時、カラー写真はまだ一般的ではなく、白黒写真に人手を介して着色を施した上で製版する人工着色によってカラーを実現するものであったが、「風景写真」を「カラー」で「安価に」収集出来るメディアとしては、絵葉書をおいて他になかった。

柏木（2000）は、日本の初期の絵葉書について、大きく三つの系統に分類している。第一は美人絵葉書というべきもの、第二は風景・名勝を撮った観光絵葉書というべきものの、第三は事件や出来事を撮ったものである<sup>31)</sup>。そして、初期の絵葉書は、この第三の葉書が主流であったと指摘している。

日本における絵葉書は、日露戦争の勝利を周知させる目的で発行されたものが人気を呼び、その収集熱が流行現象になった。それらの絵葉書に複製された写真は、砲戦中の写真や塹壕を掘る兵士を撮った写真、篤志看護婦の活動を撮ったものなど多岐にわたり、一般の人々に戦場とはどういうものなのかを知ら

せる役割を果たした<sup>32)</sup>。

絵葉書のもつ国際的な宣伝効果については、当時から認識されていた。樋畑（1936—1983）は、日露戦争の絵葉書が発行された意義について「外国新聞記者乃至は外国従軍武官によりて本國に通信せられ又日本人の手によりて歐米の都市に散布されたと云ふ事が世界人の日本精神認識の上に大に與つて力ありと云ふべき<sup>33)</sup>」と評しており、写真絵葉書が当時の世界の人々に及ぼした影響の大きさを強調している。

さて、絵葉書は戦争のみならず、世の中で起きる様々な出来事を報じるニュース媒体としても多く発売された。当時の代表的な絵葉書収集雑誌である『絵葉書世界』の1912年（明治45年）五月号には「サア水が出た、サア火事が起こった、サア花が咲いた、サア飛行機が飛んだといふと、絵葉書屋は血眼になって方々をかけ廻り手早く新しいものを拵へて店頭に陳列して、そして多くの人に事ある毎に先づ以って注目せられる、蓋し絵葉書は時代の寵児である<sup>34)</sup>。」と記されており、いかにニュース関連の絵葉書の需要が高かったかが分かる。

ニュースを伝える媒体として、古くは瓦版があり、明治以降は新聞も発行されていた。それにもかかわらず、当時の絵葉書はニュースを伝える媒体としても機能していた。もちろん、ニュースの主役は事件や事故を写した写真である。人々は、絵葉書に印刷された写真を通して、世の中の出来事やニュースを知ったのである。

なぜ、ニュース写真が絵葉書として流通したかであるが、新聞用紙に鮮明な写真を印刷することは当時の印刷技術では難しかったと

いう要因が大きい<sup>35)</sup>。いっぽう、絵葉書は上質紙を用いてコロタイプの写真製版で印刷されるので写真を鮮明に再現することが出来た。それゆえ、絵葉書は写真を広く伝えるメディアとして新聞よりも有用であると見なされ、膨大な量の写真絵葉書が発行されたのである。

当時の絵葉書雑誌には、「写真術と印刷術を極度に利用したら、社会上の種々の驚くべきできごとの際どい所を写し撮って絵はがきに刷りだし、たちまちそれに羽を生やして、全国津々浦々、一步進んで海外までも飛び回らせる<sup>36)</sup>」という記述がある。それが、当時においては絵葉書の特質を生かす最上の方法であると考えられていた。

当時の論考においても「繪葉書なるものは二十世紀に於て世界的に生れ出し所の交通文化の一異彩とも云ふべきものであつて、其出来事の実相を極めて性格にそして解し易く、且つ迅速に之を世界に報道すると云ふ使命を自然に有してゐる<sup>37)</sup>。」と書かれていたように、絵葉書が持つ報道メディアとしての特性は既に指摘されていた。

また、当時の写真絵葉書は、定期刊行物として時々刻々のニュースを報じるものもあった<sup>38)</sup>。例えば、パラオ諸島からの観光団が日本に到着すれば、その模様が写真絵葉書になり、大きな海難事故が発生すれば九死に一生を得た乗組員を写して写真絵葉書になり、東京市内で洪水が起きればその惨状が写真絵葉書となり、磐梯山で噴火が起きれば、犠牲者の写真をも含む現場の写真絵葉書が売り出された。

その傾向は、1923年（大正12年）に起こった関東大震災でピークを迎える。凄惨な災害

の状況を伝えようとする膨大な量の写真絵葉書が発行され、全国に流通した。多くの死体が克明に映し出された写真絵葉書も多数出回り、当局によって発売禁止にされたものまであったという<sup>39)</sup>。これは、佐藤（1994）が指摘しているように、当時の写真絵葉書が、現在の写真雑誌と同等のジャーナリスティックな機能を果たしていたことを表している<sup>40)</sup>。

実際に、当時のニュース絵葉書は新聞顔負けの迅速さがあったとされ、「社会の不意の出来ごと、たとえば星亨の暗殺ありとせんか、一時間もたつと新橋・京橋・日本橋などでは、声高々にその絵はがきを売って歩く<sup>41)</sup>。」と記述されるほどの即時性をも持ち合わせていた。

このように、絵葉書はその草創期においては「時事的な報道メディア」としての一側面も持っていたと言える。そして、大正～昭和期にかけて新聞の写真印刷の発展と入れ替わるように、事件を報じた写真絵葉書は、次第にその役割を終えていくことになった。

### 3-2. 絵葉書が持つメディア的特性

これまで検討してきた内容から、絵葉書が持つメディア的な特性について整理すると、おおよそ以下のようにまとめることが出来る。

田邊（2002）も指摘しているように、まず挙げられるのは、絵葉書の生産者から消費者へ流れる、マス・メディアとしての特性である<sup>42)</sup>。生産者は絵葉書を大量に生産し、不特定多数の消費者へ販売される。特に、画像情報を伝達する手段に乏しかった時代においては、絵葉書は間違いなくマス・メディアとしての機能を果たしていた。生産者は、売り上

げを伸ばすために、人々の関心を惹く題材を取り上げたから、絵葉書に印刷された図柄は、すなわち人々の興味・関心をも反映するものであった。もちろん、ニュースを伝える媒体としての絵葉書は、現在では既にその役目を終えているが、名所旧跡を紹介した観光絵葉書は依然として発行され続けていることを考えると、人々の関心を惹きつけるメディア的な特性は現在に至るまで引き継がれていると考えて良い。

次に挙げられるのは、絵葉書の消費者から消費者へ流れる、パーソナル・メディアとしての特性である。絵葉書が郵便物として差し出される時、特定の差出人から特定の受取人へ情報が伝えられる。その情報は、先述したマス・メディアとしての画像情報に、私信としての情報が付け加えられている。このように、絵葉書はマス・メディアとパーソナル・メディアの両方の機能を兼ね備えているという点で、新聞や写真と大きく異なっていると言える。

さらに、絵葉書に貼られた切手の値段や種別や、消印の地名や日時からも情報を読み取ることが可能である。時代によっては検閲の有無も確認出来る。1枚1枚の絵葉書の情報量は少ないが、ある時代における多数の絵葉書から得られる情報を総合的に読み取ることで、その時代の歴史的な背景や人々の意識を浮かび上がらせることも可能になるであろう。

## 4. 新聞報道における「絵葉書」記事の推移に関する検討

インターネットが世界的に普及した21世紀においても「絵葉書」は発行され続けている

る。先述したように、報道メディアとしての絵葉書の役割は既に終えているが、観光地において名勝旧跡など観光地の風景を収めて販売される観光絵葉書や、イベントの開催記念や販促グッズとして命脈を保っている<sup>43)</sup>。インターネット上の代表的な検索サイトであるYahoo! Japanで「絵葉書」について検索すると、4,310,000件ヒットするほか<sup>44)</sup>、「絵葉書のように美しい景色」といったような例えで用いられるなど、形容詞的な使われ方もなされている。絵葉書が社会的に定着して久しく、かつてほどの役割は占めていないにせよ、まだ過去のものにも死語にもなっていないと言って良い。

絵葉書は、その誕生以来、社会的にどのように認知され、受容されていったのであろうか。また、「絵葉書」の使われ方、報じられ方にはどのような推移が見られるのであろうか。

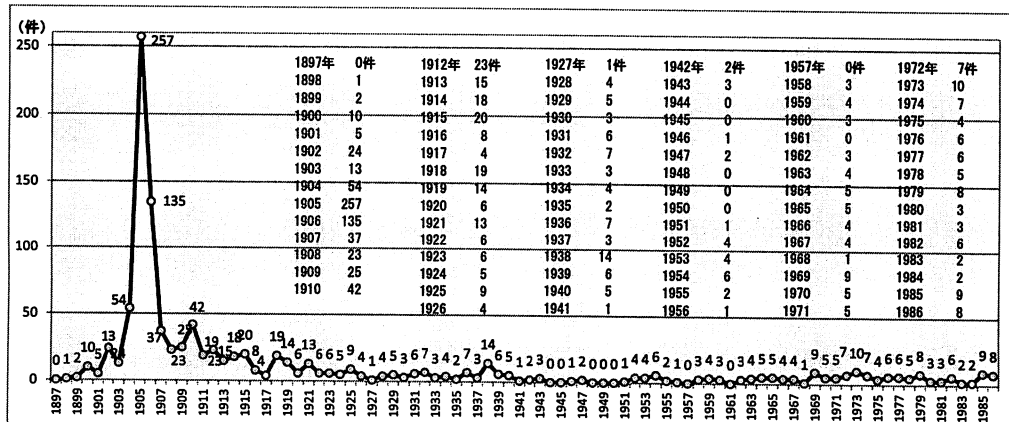
本稿では、これらを検証する指標として日本の新聞記事に着目した。具体的な方法として、読売新聞の記事検索サービス「ヨミダス歴史館 (<http://www.yomiuri.co.jp/rekishikan/>)」を利用した。「ヨミダス歴史館」は、1986年

(昭和61年) 以前と以降ではシステムが異なっており、前者は見出しと記事に関連付けられたキーワードで検索するのに対し、後者  
は見出しおよび記事を全文検索出来るようになって  
いる。すなわち、前者は絵葉書に関する記事  
を効率的に検索出来る一方、記事中に「絵葉書」  
が使われていてもキーワードで関連付けられてい  
ない記事は拾い出すことが出来ず、後者は全文  
検索が可能であるので検索漏れがない一方、記  
事中に「絵葉書」が使われていれば拾われるた  
め、特に絵葉書について言及していない記事も  
拾い上げてしまう特徴がある。

本稿では、上記の特徴に留意した上で、明治・大正・昭和・平成に至る「絵葉書」報道の変遷について検証してみることにする。

#### 4-1. 明治・大正・昭和期の読売新聞における「絵葉書」記事の出現状況

〈図1〉は、「ヨミダス歴史館」の見出したキーワード検索で「絵葉書」が取り上げられた記事の件数の推移を年別にグラフ化したものである。1897年（明治30年）以前は0件であり、1898年（明治31年）から1986年（昭



＜図1＞新聞記事における「絵葉書」出現件数（読売新聞：1898年～1986年）

和61年)までの累計は1050件となっている<sup>45)</sup>。

確認出来る限り、「絵葉書」がキーワードとなった記事で最初に登場するのは、1898年(明治31年)12月21日の「新年當て込みの賣物」という見出しがついた記事中である。「京橋區南金六町の關口方より賣出したる頗る美麗なり」として、絵葉書が売り出されている事実が短く記載されている。ただ、私製葉書の発行を許可する通信省令が出されたのは1900年(明治33年)10月のことであるから、この時に売り出された「絵葉書」はまだ国内の郵便物として使用出来るものではなかったことに注目する必要がある。この記事では、絵葉書は年末・年始商戦用の商材として、軍艦カルタや子供風双六とともに紹介されているので、実際に郵便物として使用されることを前提としたものではない、「おもちゃのようなもの」として作られたのではないかと思われる<sup>46)</sup>。

絵葉書が解禁される前は、ドイツで絵葉書が流行していることを紹介する1899年(明治32年)3月7日の記事や、フランスでドレフュー疑獄に関する絵葉書の発売が禁止されたという1899年(明治32年)9月14日の記事などが見られる。1900年(明治33年)4月13日には、「東宮御真影入の繪葉書(独逸伯林)」との見出しで、ドイツのベルリンで皇太子殿下(のちの大正天皇)の肖像画の絵葉書が発売されたとの情報が記事になっている。「近年歐洲各國にて特に独逸國にて繪葉書の流行することを豫て聞き及べる所なるが」と記事中にあるように、当時の欧州で既に絵葉書がブームになっていることが触れている。

1900年(明治33年)10月以降、民間で絵葉書を作ることが出来るようになったが、その翌月の11月17日と21日には、絵葉書の発行に関する広告が登場し、12月3日には新年用の絵葉書の発売広告も出されている。しかし、当時の絵葉書は急造されたためか海外製の絵葉書と比べて粗悪なものが多かったのか、12月12日に「悪インキで摺られちや叶わない西洋風に何とか品よく出来ないものか」という苦言が出されている。

登場したばかりの絵葉書は、まだ慣れていない人も多かったためか切手を貼る場所を間違える例が多発したという。そのため、取り締まりに郵便条例適用も検討しようとする記事が、1901年(明治34年)3月12日に出されている。

1902年(明治35年)以降は、順調に絵葉書の浸透が進んでいった。各種の絵葉書が発売される記事が激増していき、記念絵葉書を買おうと売下所を3~40軒回ったが売り切れだったという嘆き節も掲載されるなど(6月26日)、いよいよ日本でもブームが巻き起こっていく。

絵葉書の収集ブームは日露戦争期に頂点を迎え、「絵葉書」関係の記事も激増し、1904年(明治37年)には54件、1905年(明治38年)にピークの257件に達する。戦争の勃発以来、「戦勝記念の絵はがき、小島沖舟筆「仁川旅順海戦」6枚組12銭で発売」(1904年=明治37年3月14日)、「日露戦争絵はがき木曜会の図案、東京堂など発売」(同年7月6日)、「征露記念絵はがき好況 第1回目発行分が1、2時間で売り切れ、増刷へ／通信省」(同年9月9日)といった具合に、絵葉書が立て続けに発行され、立て続けに記事に



なっていた。日本における絵葉書の普及は、日露戦争の勃発とその行方が大きな役割を果たしたことは、新聞報道の激増ぶりからも裏付けられる。当時の新聞は、技術的な問題から写真を掲載することが困難であったので、一般の市民にとって、絵葉書が戦場の様子を身近に接することの出来る唯一のメディアであった。

さて、日露戦争が終わると、「絵葉書」に関する記事も減少していった。1906年（明治39年）は135件あったが、1907年（明治40年）以降は37件、23件、25件と落ち着いていき、大正時代に入ると年間10件以下まで減少する年が多くなる。

しかし、絵葉書の収集ブームは依然として続いていたので、報道量の減少は、むしろ絵葉書の社会的な定着を意味しているものと考えられる。当初は絵葉書が発行されるだけでニュースになったが、絵葉書の普及と定着とともにニュース性がなくなっていったのである。1923年（大正12年）9月に発生した関東大震災では、被災の様態を写した膨大な種類の絵葉書が発行されたが、「震災関連絵葉書の発売」という事実はもはやニュースにならなかった。

絵葉書の内容に対する関心も多様化が進んでいった。もちろん、「新年絵葉書ではやはり戦争絵が多い」（1914年＝大正3年12月1日）とあるように、戦争に関連する絵柄は引き続き多かったものの、「子供の滑稽物や涼しい風景画がよく売れる」（1915年＝大正4年8月4日）とあるように、売れ筋の多様化も進んでいる様子が伺える。新刊雑誌として「日本絵葉書月報」が発刊されるニュースは記事となり（1919年＝大正8年5月22

日）、「趣味的の年賀状 自製絵はがきの楽しみ」（1924年＝大正13年1月6日）といった、自分で作る絵葉書の楽しさを紹介する記事も見られるようになる。

昭和期に入ると、絵葉書関係のニュースも再び戦時色が強まってくる。「満州国皇帝陛下の御来訪記念絵葉書が発売される」（1935年＝昭和10年4月8日）という広告が大きく出され、「銃後活動の絵葉書」（1938年＝昭和13年3月9日）、「戦線へ絵はがき慰問」（同年3月9日）、「前線将兵へ贈る絵葉書 “故国の姿”」（同年5月27日）など、戦線へ絵葉書を送って慰問することに関連する記事が増えていく。「空からの帝都 絵葉書を発売禁止／警視庁」（1938年＝昭和13年9月24日）のように、軍機上の理由から航空写真の絵葉書の発売が禁止されるという戦時色の強まる記事も見られる。1938年（昭和13年）の記事数が14件と、前年の3件から大きく増えているが、その内訳は上記のとおり戦地への慰問に関する記事の増加によるものである。

太平洋戦争が始まると、絵葉書の記事も完全に戦争一色となる。しかし件数は少なくなり、太平洋戦争期間中の「絵葉書」に関する記事は、「皇軍慰問絵葉書」（1942年＝昭和17年4月28日）、「嬉しい売切れ 軍人援護徽章や記念絵葉書」（同年12月7日）、「戦争絵葉書で慰問の速射砲」（1943年＝昭和18年3月13日）、「記念切手絵葉書発行」（同年8月3日）、「献金つき絵葉書 大東亜戦3周年を期して発売」（同年9月8日）の5件だけである。敗色が濃くなると絵葉書関係の記事も見られなくなり、そして敗戦を迎える。

戦後初めての絵葉書に関する記事は、1946年（昭和21年）10月7日に確認される。その

内容は、「絵葉書について書かれた本の刊行」を紹介する記事で、「きれいに彩色された異国風な絵はがきといふよりはなつかしい銅版画をみるやうなまことにこのましい本である」と表現されているように、戦時色を連想される記述は見られない。

戦後初めての絵葉書に関する広告は、1947年（昭和22年）6月19日に出されており、「平和観光日本への躍進!! 絵葉書の御用意は是非当店へ」と書かれており、取り扱い品目は全国の名所や神社仏閣の絵葉書などとなっている。平和が強調され、戦前に発行された「戦争ものの絵葉書」は存在しないかのように扱われているところが興味深い。

このように、戦前と戦後では絵葉書に対する新聞記事の内容は一変する。「日米結ぶ1少女の手紙 各州から返信が殺到」（1952年＝昭和27年1月5日）、「絵葉書に結ぶ日印親善」（1954年＝昭和29年4月22日）といった絵葉書を通した国際親善を取り上げる記事や、「上野、浅草の絵葉書近く一斉売出し」（1952年＝昭和27年11月10日）、「観光絵ハガキ 千代田で発行」（1954年＝昭和29年10月20日）といった、観光用の絵葉書の発売に関する記事が主流となっていく。絵葉書の制作・販売業の開業を目論む人のために、原盤の制作から問屋への売り込みまで指南する記事（1952年＝昭和27年10月13日）まで出るほど、絵葉書の収集熱は依然として盛んであった。

その他、海外へ外遊に出かけた国会議員が現地で絵葉書を買って求め、地元の有権者に送るといった行為を問題視する記事が度々登場している（1953年＝

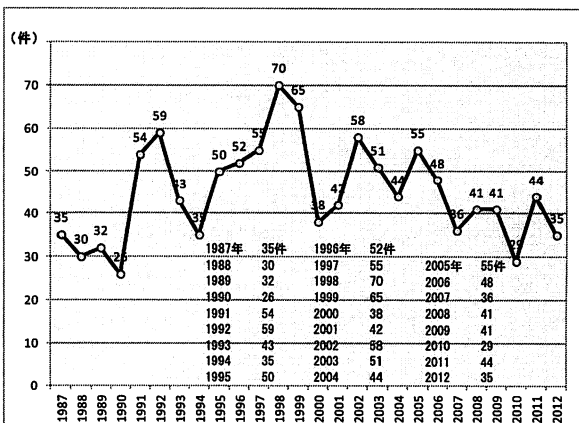
昭和28年9月9日、同年9月10日、1955年＝昭和30年7月26日など）。海外から送られる絵葉書は有権者への「良いお土産」となったらしく、ロンドンを訪れたある国会議員は二千枚もの絵葉書を購入して日本大使館に持ち込み、宛名リストを示して投函を押し付けたという（9月9日の記事）。舶来品がまだ珍しく、海外からの絵葉書も珍重されていたことをうかがわせる。

日本は高度経済成長期に入り、テレビ全盛の時代となっていく。東京オリンピックの時は、その開催に先立ち東京オリンピックのポスターを縮小した絵葉書が発売され、新聞記事となった（1963年＝昭和38年7月30日）。しかし、その後は絵葉書に関する記事そのものが減少していき、全く報じられない年も出るようになった。

#### 4-2. 昭和後期～平成の読売新聞における

##### 「絵葉書」記事の出現状況と内容分析

〈図2〉は、1987年（昭和62年）から2012年（平成24年）10月までの期間に「ヨミダス歴史館」の全文検索で「絵葉書」が取り上げられた記事の件数の推移を年別にグラフ化した。



〈図2〉新聞記事における「絵葉書」出現件数（読売新聞：1987年～2012年）

たものである。1987年（昭和62年）以降のデータベースはそれ以前のものとシステムが異なり、記事の全文検索が出来るようになっているので、それ以前のキーワード検索よりも件数が多くなる傾向があり、期間中の合計は1168件となっている<sup>47)</sup>。

ここで検索される記事には、「絵葉書」そのものを扱った記事もあれば、単に記事中で単語が使われただけで、必ずしも「絵葉書」に関するものであるとは言えない記事も含まれている。そのため、本稿では2000年から2012年までの561件の記事を対象とし、以下の7つの基準で分類することを試みた。

（1）過去に作成された絵葉書に関する記事  
これは、文字通り過去に作成された絵葉書を対象とした記事である。日露戦争期の旅順港や元首肖像などがあしらわれた絵葉書3000枚が発見された記事<sup>48)</sup>（2009年＝平成21年10月6日）や、大正時代の絵葉書の展示会が東京・目黒の学習院大学史料館で開催された記事<sup>49)</sup>（2012年＝平成24年5月9日）、明治から昭和初期の京都の街を紹介する本が発売された記事（同年8月26日）、東京・上野動物園が20世紀に発行した動物の絵はがき163枚を紹介する本が発行された記事（同年10月3日）などが挙げられる。これらの記事では、過去に発行された絵葉書の歴史的な意義を紹介したり、それらを取りまとめた成果を紹介するパターンが多い。

（2）新規に作成された絵葉書に関する記事  
（個人が作成した絵葉書を除く）  
現在新たに作成された絵葉書を対象とした記事である。裁判員制度をPRするための絵葉書が製作されていることを紹介する記事（2005年＝平成17年10月8日）、プロ野球チー

ムのリーグ優勝を記念したセールと記念絵葉書の発売を紹介する記事（同年10月27日）、仏教の源流を巡る特別展の開催と、その記念絵葉書が作成され配布された記事（2012年＝平成24年4月28日）、東日本大震災の被災者を支援するための絵葉書を作成して販売するイベントが大阪で開催された記事（同年8月17日）などが挙げられる。イベントの開催に合わせた記念に絵葉書が作成されたことを紹介するパターンが多い。

（3）個人が新規に作成した絵葉書に関する記事

新規に作成された絵葉書のうち、個人的に作成されたものを対象とした記事である。子どもの体験教室で押し葉の絵はがきを作成したことを紹介する記事（2001年＝平成13年2月25日）、東日本大震災の被災者を応援するため絵葉書を作成したという記事（2011年＝平成23年10月15日）などである。

（4）絵葉書を送る、届くことに言及された記事

これは、絵葉書を送ったり受け取ったりといった、絵葉書を通したコミュニケーションについて言及された記事である。「絵葉書のもつ味わい」と題して、旅先から絵葉書を送って相手を感動させたことを紹介する記事（2005年＝平成17年7月30日）、単身赴任した夫と娘が絵葉書で文通している様子を紹介する投書（2009年＝平成21年2月10日）、学生街の店主が、学生と卒業後も交流が続き、絵葉書が送られてくる様子を語っている記事（2010年＝平成22年9月20日）などである。絵葉書そのものについての記事ではない。

（5）形容詞として使われた記事  
絵葉書が形容詞的な使われ方をしている記事

である。写真集の美しさを紹介するところで「観光地の絵葉書の様なきれいなみの景色ではない。祈りの気持ちが込められた〈心の風景〉である」と表現された記事（2000年＝平成12年3月19日）、ロケ撮影支援組織の設立に関連して「絵葉書的な名所の紹介ではなく、その土地で暮らす人間と風土を深く描いた物語こそ、人々の胸を打ち、長く記憶に残るからだ」と表現された記事（2001年＝平成13年6月25日）、環境を守る社会貢献策を紹介する流れで、「インターネットで絵葉書のような画像つきメッセージを電子メールで送ると、画面に広告を出しているスポンサーが一件あたり二十円を日本野鳥の会などの環境保護団体に寄付する」と説明されている記事（同年9月11日）、シドニー五輪のマラソンで金メダルを獲得した高橋尚子選手がトレーニングした場所について「こんな絵葉書みたい

な景色ってあるんだ。自分だけ見るのはもったいないな」とつぶやいた記事（2003年＝平成15年1月6日）、などである。これらは、「絵葉書のような美しい景色」「絵葉書的な名所」などのように、観光地の景色や名跡を紹介するために作られた絵葉書が、逆に景色や名跡を紹介するために用いられている。

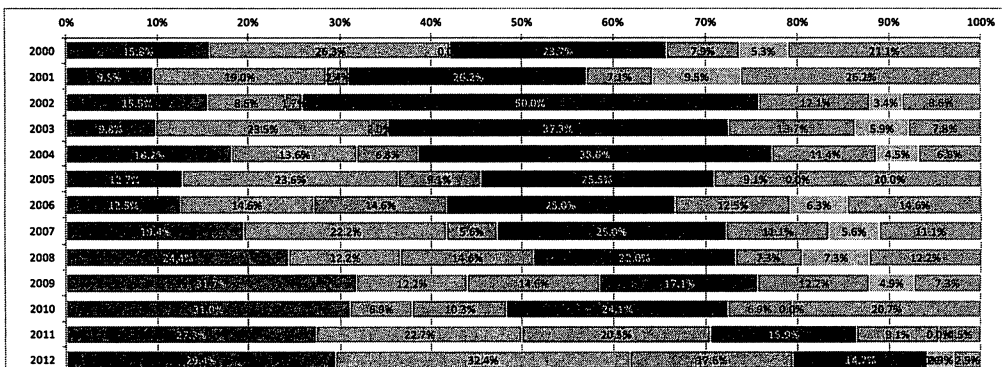
#### （6）その他の記事

特に絵葉書に関する記事ではなく、4と5にも当てはまらない記事である。趣味の工作の紹介の記事で「箱の上に絵葉書などを置いて、辺をマスキングテープで貼っていくと、きれいな宝箱に」と使われた例（2012年＝平成24年9月1日）のように、ただ「絵葉書」という言葉が使われているだけであり、特に意味のある言及がなされていないと判断される記事は、ここに分類した。

#### （7）不明

＜表1＞「絵葉書」に関する記事の分類（2000年以降の件数、読売新聞）

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	合計	%
(1)過去に作成された絵葉書に関する記事	6	4	9	5	8	7	6	7	10	13	9	12	10	106	18.9%
(2)新規に作成された絵葉書に関する記事	10	8	5	12	6	13	7	8	5	5	2	10	11	102	18.2%
(3)個人が新規に作成した絵葉書に関する記事	0	1	1	1	3	5	7	2	6	6	3	9	6	50	8.9%
(4)絵葉書を送る、届くことに言及された記事	9	11	29	19	17	14	12	9	9	7	7	7	5	155	27.6%
(5)形容詞として使われた記事	3	3	7	7	5	5	6	4	3	5	2	4	0	54	9.6%
(6)その他の記事	2	4	2	3	2	0	3	2	3	2	0	0	1	24	4.3%
(7)不明・その他	8	11	5	4	3	11	7	4	5	3	6	2	1	70	12.5%
合計	38	42	58	51	44	55	48	38	41	41	29	44	34	561	100.0%



＜図3＞「絵葉書」に関する記事の分類（2000年以降の比率、読売新聞）

データベースには登録されているが、記事内容を確認出来なかった記事はここに分類した<sup>50)</sup>。

以上の基準に基づき、561件の記事を分類・集計したものが〈表1〉であり、比率であらわしたものが〈図3〉である。

記事の件数と比率の推移から、まず(1)過去に作成された絵葉書に関する記事が増加傾向にあることが分かる。特に、戦前期の絵葉書が発見された、取りまとめられた、展示されたといった記事が増えているということは、それだけ社会的な関心が高まりつつある反映であると考えられる。これまでは美術館や博物館に足を運ばなければ見ることの出来なかった古い絵葉書が、インターネット上で手軽に見ることが出来るようになったこととは無縁ではないだろう。(3)個人が新規に作成した絵葉書に関する記事も増加傾向にある。特に、東日本大震災が発生した2011年の記事には、震災の被災者支援で「絵葉書」が使われたり自作の絵葉書を作って送るなど、「絆」を深めるシンボルの一つとして活用されている報道例が見られる。インターネットで手軽に連絡を取り合うことが出来る時代であるからこそ、直筆で描く絵葉書の存在が、より象徴的に浮かび上がる。「インターネットという新しいメディア」は、「絵葉書という従来からのメディア」の再発見と再評価、そして共存に貢献していると判断して良いのではないだろうか。

(2) 新規に作成された絵葉書に関する記事も安定的に出現していることも、絵葉書の社会的な定着を裏付けている。現在は、展示会などのイベント開催の記念品ないしは販促用のグッズとして発行されることが多いが、

実際にポストに投函されなくても、コレクションの対象としての価値が現在もなお残っていると考えられる。

「絵葉書」が形容詞的な使われ方をしている記事が1割近くを占めていることも注目点である。そのほとんどは「絵葉書のような美しさ」といった形で使われており、絵葉書は「美しい景色」を表すイメージとして定着していることを示唆している。かつては報道メディアとしての役割も担っていた絵葉書であるが、21世紀の現在において、まず抱かれる絵葉書のイメージは「美しい景色」なのであろう。

## 5. 現在の絵葉書研究と公開の状況

前述したように、絵葉書をめぐる先行研究は、様々な視角から論じられてきたが、各々の専門領域ごとに独立に研究されていて、相互に連携した考察はあまり行われてこなかった。佐藤(1994)が指摘するように、絵葉書をデータとして記録し表示することが困難であることが挙げられる<sup>51)</sup>。すなわち、引用という形での利用を安定させるためには、題名や刊記といった記録・分類システムが整備される必要があるが、単葉で雑多な印刷物のひとつでしかない絵葉書は、それが未整備である。この点が、記録・分類システムが確立している書籍や新聞とは異なり、絵葉書研究の困難さを背負っている。さらに、絵葉書は単品で存在し、発行期日の特定が難しいものも多いので、絵葉書の体系的な研究をさらに困難なものにしている。

これらの問題点の解決策を探りつつ、まず

は絵葉書を収集・分類し、インターネット上などで公開する試みは既に始められている。

例えば、京都大学地域研究統合情報センターの「戦前期東アジア絵はがきデータベース」では、戦前の外地に関する絵葉書を中心に数千点が収録されている<sup>52)</sup>。函館市中央図書館の「デジタル資料館」での絵葉書の収録数は一万点を超えている<sup>53)</sup>。新潟県立歴史博物館の「笹川勇吉氏旧蔵絵はがきコレクション」では、個人が収集・寄贈した二万点を超える絵葉書が収蔵され、一部が公開されている<sup>54)</sup>。東北芸術工科大学の「東北文化研究センター アーカイブス」で収録されている国内外の絵葉書は三万点に達する<sup>55)</sup>。日本大学文理学部の「アジア歴史史料デジタルアーカイブ」では、絵葉書が撮影された場所を地図上で確認出来るシステム仕組みが構築されている<sup>56)</sup>。神戸市にある「絵葉書資料館」では主要な絵葉書が常設展示され、インターネット上でも公開されている<sup>57)</sup>。このように大学や博物館などの研究機関を中心として民間においても、絵葉書のデータベースを収集・公開しているサイトが多数開設され<sup>58)</sup>、その数は増加傾向にある。

## 6. まとめと今後の課題

絵葉書は、出現した時代においては、数少ない視覚的情報伝達メディアであり、発行数も多く、比較的廉価で買い求めることの出来る大衆的なメディアであり、それゆえ収集の対象として圧倒的に人気を集めるメディアであった。また、絵葉書は郵便制度の周辺に

あって、切手ほど国家政策と密接に関わるものではないが、一定の政治的影響を受けつつ、人々との日常のコミュニケーションや消費文化を反映するメディアであった。特に写真絵葉書は、その視覚情報からリアリティを与えられ、対象を見たという気分させる特性を有している。絵葉書の普及は、印刷がもたらした大量生産による大衆化であり、郵便制度がもたらしたコミュニケーションの新しい形態の一翼を担うものであり、写真がもたらした視覚情報の拡大であった。

戦前の絵葉書ブームは日露戦争期に一つのピークを迎えたが、それは新聞記事の報道量でも裏付けられた。その後も絵葉書の収集熱は続いたにも関わらず報道量は減少していったが、それは絵葉書が社会的に完全に定着することによってニュース性が薄れたためであると判断することが出来る。太平洋戦争期は、絵葉書に関係する記事も戦争一色となり、敗戦とともに一時途絶えることとなったが、戦後ほどなくして復活し、観光振興や交流促進の文脈で報じられるようになった。現在は観光絵葉書またはイベント開催の記念品ないしは販促グッズとして生き残っている。21世紀以降は、古い絵葉書に関する新聞報道も増え、絵葉書の再発見と再評価が進んでいることもうかがわせる。

また、「絵葉書のような美しい景色」のように、形容詞としての使われ方もされていることも明らかとなった。まず美しい景色があり、絵葉書はそれを小さく再現したものに過ぎないのに、今では逆に絵葉書が美しい景色を形容する言葉になっていることは興味深い。

今後の検討課題としては、絵葉書に関する

さらなる情報の収集と研究成果の検討、そして一層の新聞記事の検証である。本稿では、新聞記事の検索対象として読売新聞のデータベースを用いたが、朝日新聞をはじめ、明治期から現在まで発行され続けている他の新聞の記事についても検索を進めていきたい。また、昭和以前の記事は見出し検索と予め登録されているキーワード検索しか出来ないため、絵葉書について扱った代表的な記事しか拾い出せず、多数の検索漏れもあることが予想される。明治期からの全ての記事の全文検索が出来る環境が整わなければ現実問題として難しいが、何らかの工夫を施すことにより、検証の幅を広げていきたいところである。

本稿では触れなかったが、「絵葉書帳」に注意を払うことも有益であると考えられる。絵葉書を収集・整理するためのアルバムというべき絵葉書帳は、絵葉書の収集がブームとなっていた明治期から普及が進んでいた。個人所蔵の絵葉書帳の、どのような種類の絵葉書がどのような順序で並べられていたかに関する情報を数値化して記録しておく、その情報の蓄積とともに、当時の人々の収集指向を伺い知ること出来るであろう。

「絵葉書」がもたらした様々な影響、そして社会的意味をさらに解明していくため、引き続き取り組みを進めていきたい。

## 注

- 1) 小川 (1990) 6 ページを参照。小川の研究によると、絵葉書の起源は1870年 (明治3年)、ドイツのオルデンブルグのプロシヤ宮廷御用所肆兼印刷業者のシュワルツが、「普仏戦争に際会し、余儀なく旅館に逗留中の両親を慰問すべく、簡単な絵画を印刷した私製絵葉書を制作して送った」のが、その濫觴とされている。

- 2) 佐藤 (1994) 41 ページを参照。日本における制度としての私製絵葉書の許可は1900年 (明治33年) 10月1日であったが、それは絵葉書の使用を許可する省令として受け止められ、10月5日発行の雑誌『近世少年』の付録には、早くも絵葉書が添付されたという。
- 3) 小川 (1990) 25 ページを参照。世界の絵葉書の発行高は、当時のフランスの雑誌『le Jour de Curieu』の記述を引用する形で紹介している。
- 4) この文献は1936年 (昭和11年) に日本郵券倶楽部から発行されたが、昭和58年 (1983年) に復刻版が岩崎美術社から刊行されている。なお、本稿では復刻版について参照した。
- 5) 樋畑は、実際に通信行政にも関わり、記念絵葉書の作成にも携わっている。佐藤 (1994) は、絵葉書の作成側としての経験を踏まえてまとめられた文献としては、ほとんど唯一のものであると評価している。佐藤 (1994) 23 ページを参照。
- 6) この絵葉書集成は、明治・大正・昭和期の絵葉書を網羅的にまとめた資料として、後続する研究に大きな影響を与えた。
- 7) 秋山 (1988) らによる成果は、おもに美術史としての観点から絵葉書を分類している。
- 8) 関東大震災の写真絵葉書の中でも、特に惨状の激しいもの、死体が写されたものは、治安維持のために警察から発売禁止になったものもあるという。なお、写真ジャーナリズム史として震災絵葉書を論じた部分は、木村・石井編 (1990) のうち、135ページ～166ページの部分に詳しい。
- 9) 中川 (1990) は、元来鉄道史研究の関心から絵葉書を収集していたが、絵葉書のもつ史料性の幅広さに気付き、旅と交通の観点から論考を深めた。
- 10) 佐藤 (1994) は、主に風景論の視点から絵葉書を論じた。絵葉書に着目した研究については、収集家による収集の蓄積と出版が絵葉書研究のための素材を提供したと評価する一方、組織的な分析はまだ手つかずのままであるとも指摘している。
- 11) 小川 (1990) は、印刷術の発達と絵葉書の隆盛を追いかけるなど、産業史の観点からも絵

- 葉書に着目しており、明治期における絵葉書の起源と発達を整理している。
- 12) 富田 (2005) は、日本の絵葉書の多様性に言及しつつも、日本の絵葉書の歴史は日本の近代化の歴史を反映するものであり、また戦争の歴史を反映するものであったとしている。
  - 13) 柏木 (2000) は、絵葉書は今日のグラフィズムの持つ機能を最初に担ったメディアの一つであったとしている。
  - 14) 田邊 (2002) は、当時の絵葉書は現在とは比較出来ないほど重要なメディアであったと指摘し、絵葉書の持つ情報伝達能力の高さ、特に差出人と受取人を結びつけるメディアとしての能力の高さを評価している。
  - 15) 橋爪 (2006) は、絵葉書の草創期におけるメディアとしての役割に着目しており、「画像入りの私信」という観点から、当時の絵葉書と現代の写真添付つき電子メールの間に類似性を見いだしている。
  - 16) 「日本絵葉書会」<http://www.nihon-ehagakika.com/index.html> 絵葉書の収集を趣味とする愛好家の団体であるが、学術的な研究活動も力が入れている。
  - 17) 絵葉書の体系的な研究としては、貴志 (2006, 2007, 2008) の成果が挙げられるが、比較的最近のことである。
  - 18) 佐藤 (1994) 24ページを参照。佐藤は、絵葉書に関するこれまでの諸研究を「孤立した探索」ととし、全体として見ると基礎研究の部分がもっと多いと評している。
  - 19) 切手と国際政治の関係について論じたものには、内藤 (2006) の論考がある。切手には、それを発行する国家の意思が色濃く反映しており、満州国の成立によって中国をはじめとする諸国にどのような力学が働いたかについて、切手と郵便制度の観点から考察を行っている。
  - 20) 最も初期の絵葉書は、東京名所や俳優名妓等の写真版、石版印刷の粗末な花鳥画などであったとされる。
  - 21) 山本 (1971) 44ページを参照。この時、通信省が発行した日露戦争の戦勝記念絵葉書は、全8回、47種類ものシリーズとなって人気を博した。私製の絵葉書も大量に発行され、日露戦争関係のものだけで4500種類に達した。
  - 22) 同上、43ページを参照。
  - 23) 同上、45ページを参照。「出席者は絵葉書一万枚以上の所有者に限る」という案内のくだりには、「我々文句なしにギャフン、いかにファンでも一万枚はと驚ろいたが世間は広い、さうたう集積者があつたという話でもう一遍驚かざるを得なかった」と描写されている。
  - 24) 林 (2004) は、「広告」の観点から絵葉書に着目し、人々がどのように購買意欲を掻き立てられたかについて考察を行っている。
  - 25) 小川 (1990) 37ページを参照。明治44年7月発行の『日本名所絵葉書目録』の記述による。なお、観光絵葉書の多くは手で彩色されたカラー絵葉書であった。
  - 26) 佐藤 (1994) は、絵葉書文化が発達した要素の一つに、海外から絵葉書がもたらされたインパクトがあることを指摘している。ヨーロッパでは既に絵葉書の蒐集がブームになっており、まだ私製絵葉書が許可されていない頃から、絵葉書の交換を日本に申し込んでくる蒐集家もいたという。
  - 27) 小川 (1990) 6ページを参照。「独逸に留学している友人から、～風景を刷ってある葉書が着いて、これを眺めた。これを頗る珍重して、来客毎に“これを示したのに、誰もめづらしがらぬ者はなかった”と述懐している。」といった記述がある。
  - 28) エリオグラフィと呼ばれる写真術が開発されたのは1826年のことであり、続いてダゲレオタイプと呼ばれる銀塩写真が開発された。1840年代にはネガポジ法が考案され、1枚のネガから複数の写真を焼くことが出来るようになった。
  - 29) 日本における印刷技術の導入と絵葉書印刷への応用については、小川 (1990) の研究に詳しい。
  - 30) 他に映像に接することの出来るメディアとしては映画があり、娯楽作品ばかりではなくニュース映画もさかんに上映され、その情報量には大きなものがあつたが、個人レベルで所蔵出来るものではなかった。
  - 31) 柏木 (2000) 96ページを参照。
  - 32) 戦場から届いた写真は日本国内で広く絵葉書として流通したが、美人絵葉書は、戦場で戦う兵隊への慰問品として大量に送られた。



- 33) 樋畑 (1936-1983) 3 ページを参照。樋畑は、絵葉書の持つ宣伝効果の大きさに着目していたがゆえ、満州事変以降に日本が国際社会からの孤立を深めていく時勢について、「官製絵葉書により適宜なる種類を制作し恤兵の頒布とともにゼネブ湖畔其他樞要なる方面に適當の散布をしたならばあのような認識不足を世界から受けずして済んだではあるまいか」と述べ、絵葉書をより多く発行して世界に周知せしめるべきという主張を展開している。
- 34) 富田 (2005) 14 ページを参照。田山花袋の絵葉書のブームについての記述。「田山花袋は報道メディアとしての絵葉書の価値を高く評価していた」と富田は指摘している。
- 35) 明治期の新聞用印刷機で新聞用紙に写真を印刷すると黒くつぶれてしまい、濃淡を再現することは難しかった。
- 36) 伊藤銀月「絵ハガキに就いて」、1905、『詩的新案 絵はがき使用法』、文学同士会、7 ページにこの記述がある。なお、ニュースを報じる絵葉書は、事件の模様を描写した版画が絵葉書となった例もあり、必ずしも写真ばかりではなかったことに留意する必要がある(ただし、写真を元に作成された版画も多い)。
- 37) 樋畑 (1936-1983) 3 ページを参照。絵葉書は「文書以上の世界人の認識をはやめ宣傳的效果が極めて有力」であるとも指摘している。
- 38) 富田 (2005) 12 ページを参照。例えば、大正時代には「時事絵葉書」と題する定期刊行物があり、当時起こっていた様々なニュースの写真が絵葉書としてあしらわれ、袋入りのセットで毎週末に発行されていた。
- 39) 震災絵葉書が売り出されると、数百メートルもの長蛇の列が出来たという。死体が映し出された写真は発売禁止に処されたが、禁止以降はプレミアムがついて出回ったという。なお、震災絵葉書については近藤編 (1993) や木村・石井 (1990) に詳しい。
- 40) 佐藤 (1994) 20 ページを参照。佐藤は、1981 年に創刊された写真雑誌『フォーカス』に掲載される興味本位の写真を「死体をのぞき見る感覚」と評しており、明治・大正期に発行されていた写真絵葉書の中には地震・噴火・水害などの災害を報じたものが少なからずあり、死体や遺骨を写した写真すら絵葉書になって流通していたことと対比し、今日の『フォーカス』につながるまなざしが、それよりも70年以上前に、絵葉書という形式で発現していたことを指摘している。
- 41) 窪田重弐「絵葉書論」、1906、『絵葉書趣味 7 月号』、日本葉書会、64 ページにこの記述がある。
- 42) 田邊 (2002) 73 ページを参照。田邊は、絵葉書が持つメディア的な意味として、マス・メディアとパーソナル・メディアの両側面を指摘している。
- 43) もちろん、絵画や美術品などをあしらった絵葉書も発行され続けているが、それは主に外国人観光客向けに用意されている場合が多い。
- 44) 2012 年 10 月 1 日現在の数値。なお、用語の揺らぎも考慮し、「絵葉書」「絵はがき」「えはがき」のキーワードが含まれるサイトを合計した。なお、同日における「ポストカード」のヒット数は、15,300,000 件である。
- 45) データベース検索においても、用語の揺らぎも考慮し、「絵葉書」「絵はがき」「えはがき」のキーワードで検索した。
- 46) この記事で言及されている絵葉書がどのようなものであったかに関する文献は見あたらず、詳細は不明である。当該の絵葉書の発見と今後の研究の進展が待たれるところである。
- 47) このデータベース検索においても、同じく用語の揺らぎも考慮し、「絵葉書」「絵はがき」「えはがき」のキーワードで検索した。
- 48) 記事中には、「当時の絵はがきは、世の中の出來事を伝えるメディアのような役割があった。人々が何に注目していたかがわかる貴重な資料だ」橋爪紳也・大阪府立大教授(都市文化論)のコメントも紹介されている。
- 49) 記事中には、「関東大震災では社屋が壊滅し発行停止となった新聞に代わり、最も速報性のあるメディアとしても活用され、壊滅した地域を写した絵葉書が全国に被害を伝えたという」という記述もあり、報道メディアとしての絵葉書の特徴にも言及されている。
- 50) データベース上では検索出来ないが、新聞の縮刷版などで内容が確認出来る可能性がある。今後の検討課題である。
- 51) 佐藤 (1994) 24 ページを参照。絵葉書研究が進んでいない理由として、データ化の蓄積不

足、すなわち絵葉書をデータとして記録し表示する方法が未だ確立していないことを挙げている。

- 52) 京都大学地域研究統合情報センター「戦前期東アジア絵はがきデータベース」<http://kishi01.kanagawa-u.ac.jp/postcard/>
- 53) 函館市中央図書館「デジタル資料館」<http://www.lib-hkd.jp/digital/index.html>
- 54) 新潟県立歴史博物館「笹川勇吉氏旧蔵絵はがきコレクション」<http://www.nbz.or.jp/jp/siry/o/hagaki.html>
- 55) 東北芸術工科大「東北文化研究センターアーカイブス」<http://www.tobunken-archives.jp/DigitalArchives/index.jsp?lang=ja>
- 56) 日本大学文理学部「アジア歴史史料デジタルアーカイブ」<http://www.chs-da.com/ahj/> ここでは、旧満州のハルビン市に関する絵葉書について、Google Maps APIを用いて時空間的に分析出来るツールを公開している。
- 57) 「絵葉書資料館」<http://www.ehagaki.org/index.html>
- 58) 例えば、大日本印刷の系列にある株式会社アートコミュニケーションズのサイト「Image Archives」では、絵葉書収集家の生田誠氏が所蔵する8万余の絵葉書コレクションの中から、資料性、芸術性、貴重性の高いものをインターネット上で公開している。DNPartcom「生田誠コレクション・イメージアーカイブ」[http://search.dnparchives.com/WEB/feature/tk\\_ikuta.html](http://search.dnparchives.com/WEB/feature/tk_ikuta.html)

#### 参考文献

- 秋山公道編 (1988)『絵はがき物語』, 富士短期大学.
- 生田誠編 (2004)『2005日本絵葉書カタログ』, 里文出版.
- 生田誠編 (2009)『麗しき日本絵葉書100の世界』, 日本郵趣出版.
- 小川寿一 (1990)『日本絵葉書小史 (明治編)』, 表現社.
- 柏木博 (2000)『肖像のなかの権力 近代日本のグラフィズムを読む』, 講談社.
- 貴志俊彦 (2006)「東アジアを描く非文字資料のデータベース化」『歴史と地理No.594 (世界史の研究207)』, 山川出版社.

貴志俊彦 (2007)「満洲国の情報宣伝政策と記念行事」(平野健一郎編『日中戦争期の中国における社会・文化変容』, 東洋文庫).

貴志俊彦 (2008)「戦争とメディアをめぐる歴史画像デジタル化の試みー満洲国ポスター&伝単データベース」『アジア遊学』第113号, 勉誠出版.

木村松夫・石井敏夫編 (1990)『絵はがきが語る関東大震災 (石井敏夫コレクション)』, 柘植書房.

小森孝之 (1978)『絵葉書 明治・大正・昭和』, 国書刊行会.

近藤信行編 (1993)『震災復興大東京絵はがき: 尾形光彦コレクション』, 岩波書店.

佐藤健二 (1994)『風景の生産・風景の解放』, 講談社.

田邊幹 (2002)「メディアとしての絵葉書」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第3号, 73-83.

富田昭次 (2005)『絵はがきで見る日本近代』, 青弓社.

中川浩一 (1990)『絵はがきの旅 歴史の旅』, 原書房.

橘爪紳也 (2006)『絵はがき100年 近代日本のビジュアル・メディア』, 朝日新聞社.

林裕樹 (2004)『明治・大正・昭和の流行をみる広告絵はがき』, 里文出版.

樋畑雪湖 (1983)『復刻版 日本絵葉書思潮』, 岩崎美術社. (復刻版: 原本は1936年発行)

村松貞二郎監修 (1980)『街 明治・大正・昭和ー絵葉書に見る日本近代都市の歩み1902→1941 2 関東』, 都市研究会.

山本笑月 (1971)『明治世相百話』, 有峰書店.

六角弘 (1981)『絵はがきが語る明治・大正・昭和史』上・下, ビッグ社.

※インターネット上のURLは2013年1月31日現在のものである。